

まごころだより

2018. 9月号

今年も納涼祭の季節になりました。この行事は利用者のためのお楽しみ会のような形で始まりました。しかし回を重ねるごとに地域の方の参加、児童館の子供たちの参加、そして今では地域の方が準備段階からお手伝いして下さるようになり、充実したものとなってきました。小さな施設の中に利用者、近所の方、子供たちがあふれかえり、近所の方も手伝いながら納涼祭を楽しんで下さっています。毎年クタクタになりながらも充実したものを感じています。地域の方が単に参加するだけでなく、ボランティアとしてかかわってくださるそれがこの納涼祭です。これは一年に一度の納涼祭で培われたものではなく、分家を中心とする近所の方を交えた日常的な活動のたまものだと思っています。



職員？

しかし、「在宅」を推し進めるには、地域交流活動や今の国の制度改革では不十分だと思っています。介護をするのは家族であり、その家族が「最期まで家で看よう」という気持ちにならなければなりません。しかし現実には認知がひどくなったり、寝たきりになったりすると施設入所となる人も沢山います。どんな状況になっても住み慣れた地域で、住み慣れた家で暮らすということにはならないのが現状です。育児に関しても同じことが言えます。統計上、希望する子供の数は3人というのが52%、1人は僅か3%。しかし実際の子供の数は平均1.7人です。希望するけれど、産めない、産み育てようと言う気にはならないというのが現状です。介護でも子育てでも言えることは「家族がその気にならない(なれない)」ということです。国は働き方改革と言い、介護や育児の休暇や時間短縮した働き方は制度としては導入しているけれど、実際はなかなか活用できない、もしくは実効性がないということになります。家族を支える手立てや制度をもっと実効性のあるものにして、「状態が悪くなれば施設」とか「子育ては無理」という意識を改革するところまでいかなければならないのです。

最近では育児や介護をする男性も増えてきましたが、統計によると共働き家庭で男性が家事をする時間は0.43時間。それに対して女性は3.45時間です。残念ながらまだまだ育児も介護も家事も女性の仕事とみなされています。



地域の方となごやかに

私達は「在宅」を追及しています。住み慣れた地域・自宅で最期を迎えることをめざし、その手伝いをしたいと思っています。人と人を自然な形でつなぎ、顔見知りの人を増やしていくことで「困ったときはお互いさま」というセイフティネットを作る。ご近所付あいを「まごころ」を通して作り上げていく。そんな思いを形としてあらわしたのが「まごころ分家」です。分家は利用者の活動の場を増やすと共に地域の方と利用者、そして地域の方の交流の場としても活用しています。多い時には15人もの地域の方が集まり、食事をしながら3時間近くも歓談していかれます。「みんなでおしゃべりすることで、近所の人が今までより近いものになった。近くにこんな場所があって良かったと」おっしゃる方もいます。一緒にお茶を飲む、食事をする、お菓子や惣菜・小物を作る、おしゃべりする、それらのことを通して次第に気心が知れるようになったのでしょうか。何かの時には声を掛けあえる関係が出来上がっていくのを感じています。

一方、財源難にあえぐ国も「在宅」を推進しようと躍起になっています。今回の制度改定では、家族や地域で互いに支えあうという富山型の理念を制度として認め、増大し続ける介護費用をなんとか減らそうとしています。



病気じゃないよ、元気だよ！

労働力不足が叫ばれ、外国人労働者導入が考えられている時代です。女性をもっと働きやすくなる改革が必要なのでしょう。

富山市では「まちなかケアセンター」の事業の一つとして、「お迎え型病児保育」というのが始まったと聞きました。保育園から熱が出たから迎えに来て欲しいと連絡があっても仕事がありすぐには迎えに行けない。そんな時、ケアセンターの職員が保育園まで迎えに行き、かかりつけ医に連れて行ってくれ、夕方まで預かってくれるというのです。この他にも急に熱を出した子供を日中預かってくれる「病児保育」というのもあり、前日に予約すれば、朝から病気の子供を預かってくれます。このような「お迎え型病児保育」や「病児保育」は共働き世帯にとっては朗報です。しかしそれで事足りるというものではないのです。小学校に上がる前の子供が熱を出した、怪我をした、そんなときに真っ先に駆けつけて欲しいのはケアセンターの人ではなく親です。知らない人が来て、病院に連れて行かれ診察されたとしたら、子供の不安は頂点に達してしまいます。もし制度や体制を作るのなら、そんな時に駆けつけられるようなものを作ることが必要だと思うのです。いくら忙しくても病気の時くらい傍についてやりたいと思うのが親です。病児保育に預けたからそれでいいというものではないのです。逆に病児保育があるのだから、子供が熱を出しても働きに来るのが当然ということになるのが怖いです。



久しぶりね、歩けるようになったよ

地域共生、みんなで支えましょう。その気持ちは大切に制度も必要でしょう。それと共に家で家族を介護しよう、子供を産み育てようという気持ちになれるような働き方改革、制度作りが必要です。女性の力は大きいものです。これからの社会がどうなっていくか、女性の力にかかっていると思います。親を看たい、子供を産み育てたいと言える社会。それが実行できる働き方。何かあれば駆けつけられるような人間味のある働き方改革、制度づくりが望まれます。

まごころでは、職員の子供が病気になったので休みたい、親の介護で時間が欲しいと言われた時、基本的に全て認めることにしています。小さな施設ですから職員が一人休むと現場は大変です。大慌てでピンチヒッターを頼む

ことになったり、しわ寄せがきたりします。それが分かるだけに休む人も心苦しい思いをしていると思っています。でもそれもお互いさまです。地域も職場も支えられ「お互いさま」の気持ちが大切だと思っています。制度が整わない今、いや制度が整っても、一番大切なことは「寛容な精神」と「お互いさま」の気持ちだと思います。



地域の方と納涼祭の準備



納涼祭の一コマ

次号で納涼祭の写真を特集します

9月の行事予定

- | | |
|--------|-----------------|
| 5日(水) | かわいい小物づくり |
| 7日(金) | ハーモニカで歌おう |
| 11日(火) | 惣菜またはお菓子づくり |
| 15日(土) | 林夫妻の歌謡ショー |
| 19日(水) | ピアノに合わせて歌いましょう |
| 26日(水) | 地域の方との食卓会 |
| 27日(木) | 三味線、民謡、踊りで盛り上がり |